

平成24年度

第27回 “北方領土を考える”  
高校生弁論大会の記録



「知る事」が  
四島返還の 第一歩

(平成24年度 北方領土に関する標語最優秀作品)

主催 社団法人 北方領土復帰期成同盟

後援 外務省 内閣府北方対策本部 北海道 北海道教育委員会  
札幌市 札幌市教育委員会 北海道高等学校長協会 北海道高等学校文化連盟  
独立行政法人北方領土問題対策協会 社団法人千島歯舞諸島居住者連盟



社団法人  
北方領土復帰期成同盟  
会長 堀 達也

第27回「北方領土を考える」高校生弁論大会の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、お忙しいところ、多くの方々にご来場をいただき、厚くお礼申し上げます。

本日の主役である高校生の皆さん、また、生徒指導に当たっておられる先生方には、本大会にご参加をいただき、心から敬意と感謝を申し上げます。

「北方領土を考える」高校生弁論大会は、高校生の皆さんに北方領土問題について、理解を深めていただき、「北方領土について考える」を主題として、聴衆の皆さんの前で、自分の考えを訴え、伝えていただき、多くの方に関心をもっていただくことを目的に開催しております。

27回を迎える弁論大会では、これまで延べ385校、2,300名を超える高校生の皆さんに応募をいただき、高校生らしい柔軟な考えと、豊かな感性のもと、若さと熱意溢れる表現力による主張や提言が、聴衆の皆さんに感銘を与えてきました。

さて、北方四島を取り巻く環境は、ロシア政府要人の相次ぐ訪問やインフラ整備が進められるなど、北方四島の不法占拠を正当化するロシアの姿勢が目立っております。北方領土問題は、我が国の主権に関わる全国民の問題であるとともに、なんと言っても、四島で平穏に生活していた元島民の方々にとっては人道上的問題であります。

政府においては、北方領土問題の一日も早い解決に向け、毅然とした姿勢で強力な外交交渉を推し進めて頂きたいと考えております。

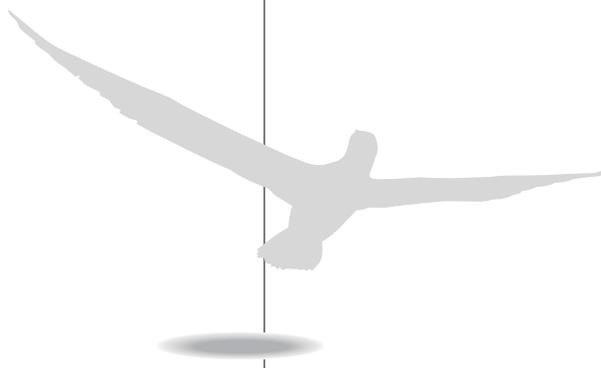
毎年この時期は、2月7日の「北方領土の日」を中心とする北方領土返還を求める、特別啓発期間であります。ご来場の皆様には、北方領土返還に向けた強い思いを共有していただき、政府の外交交渉を支え、後押しする力強いご支援を心よりお願いいたします。

また、高校生の皆さんには、これまでの取組を活かし、自ら出来ることを、それぞれの立場で、返還要求運動を支える大きな力となって頂けるよう心から期待しております。

発表者の皆さんには、7分間という限られた時間の中で北方領土についての自らの熱い思いを表現していただきたいと思っております。ご健闘をお祈りいたします。

また、会場の皆様には、温かいご声援を頂きますよう、宜しくお願いいたします。

結びに、ご来場の皆様、そして、この大会開催に、ご支援、ご協力をいただいております、外務省、北海道高等学校文化連盟弁論専門部、関係団体、参加高等学校の皆さんに、心からお礼申し上げます。



## 2 激励メッセージ



外務大臣  
岸田 文雄

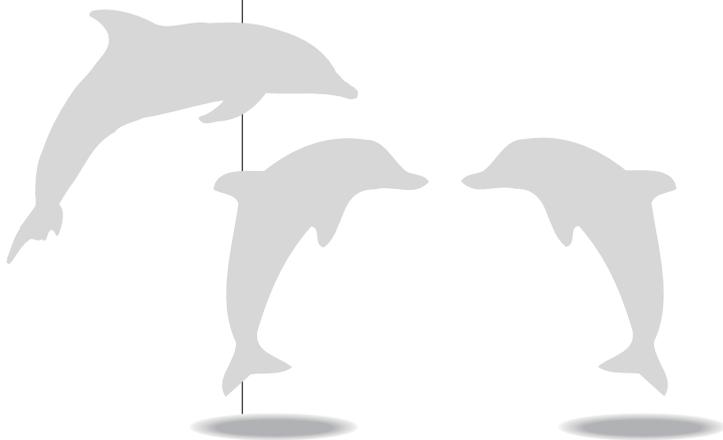
「第27回“北方領土を考える”高校生弁論大会」の開催に当たり、一言御挨拶申し上げます。

はじめに、北方領土問題に高い関心を持ち、本日の弁論大会に参加されている高校生の皆さん、そして日頃から北方領土返還要求運動に粘り強く取り組んでおられる関係者の皆様に対し、心から感謝と敬意を表します。

北方領土問題は日露間の最大の懸案であり、元島民の皆様の高齢化が進み、戦後68年を迎える現在もなおこの問題が未解決であることは大変遺憾です。日本政府としては、日露関係を全体として進展させる中で北方四島の帰属の問題を解決し、ロシアとの間で平和条約を締結するよう、今後とも強い意志をもってロシアとの交渉を行ってまいります。

北方領土問題の解決には国民の皆様のご理解と御支持が欠かせません。国民一人一人、特に若い世代の皆さんが、北方領土問題に対する認識を深め、その解決の重要性を理解し、広く訴えることが、国民世論を盛り上げ、平和条約締結に向けた政府による対ロシア交渉を強く後押しすることとなります。北方領土返還の実現に向け、引き続き日本の将来を担う皆さんから力強い御声援を頂きますようお願いいたします。

最後になりますが、本日御出場の皆さんの御健闘をお祈りして、激励の挨拶とさせていただきます。





北海道知事  
高橋 はるみ

第27回“北方領土を考える”高校生弁論大会が、多くの高校生の皆さんの参加のもと、盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。

歯舞群島、色丹島、国後島及び択捉島の北方四島は、我が国固有の領土です。しかし、第二次世界大戦終戦直後にソ連、現在のロシアに一方的に占拠され、当時四島に住んでいた約17,000人の島民が強制的に島を追われました。その後、既に67年もの長い月日が経過しましたが、依然としてロシアに不法に占拠されたままです。

この間、北方四島を追われた元島民のうち、既に1万人以上の方々が帰郷の願いむなしく他界されました。一人でも多くの方々が元気なうちに、故郷の地を踏みしめることのできるよう、一日も早い領土問題の解決が切望されています。

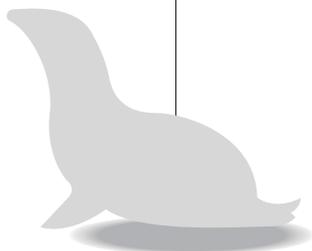
昨年、ロシアではプーチン氏が大統領に返り咲き、にわかに領土問題の進展に期待が高まりましたが、メドヴェージェフ首相が二度目となる国後島訪問を強行したほか、四島での大規模なインフラ整備を進めるなど、北方領土を取り巻く環境は、依然として厳しい状況にあります。

北方領土問題を解決するためには、政府による強力な外交交渉が重要ですが、こうした交渉を支え、後押しするためには、国民一人ひとりが、北方領土問題への関心と認識を深め、我が国全体の世論を大きく結集することがなにより大切です。

私は昨年、北方四島交流事業に参加し、道内の高校生、中学生の皆さんと一緒に、色丹島を訪問しました。私自身、島の現状を目の当たりにして、北方領土返還の思いをさらに強くしました。そして、同行した中高生の皆さんと四島在住ロシア人の若者との交流に立ち会い、この問題の解決には次の時代を担う若い方々の力が必要不可欠であることを再認識したところです。

こうした中、“北方領土を考える”高校生弁論大会が開催されることは、大変意義深いことです。本日発表される皆さんには、この問題についてこれまで学び、理解を深めたことをもとに、日ごろから考えている自分の意見や主張など、北方領土返還実現に向けた熱い思いを精一杯、発表していただきたいと思います。

弁論大会の開催に当たりご尽力いただいた大会関係者及び教育関係者の皆様に厚く感謝申し上げますとともに、本日発表される高校生の方皆さんのご健闘を心からお祈り申し上げます。



## 2 激励メッセージ



北海道教育委員会教育長  
高橋 教一

“北方領土を考える”高校生弁論大会に出場される生徒の皆さん、出場おめでとうございます。

昭和61年度に始まった本大会は、今年で27回目を数えるまでになりました。この間、皆さんの先輩方の発表が、北方領土の早期返還を強く願う元島民の方々をはじめとする地域の皆様、道民、そして国民の方々に、大きな勇気と希望を与えてきました。

厳しい事前審査を経て選考され、本大会に出場される皆さんには、日頃の学習の成果を十分に発揮し、北方領土について考えていることを、堂々と述べていただくことを期待しております。

さて、北方領土問題については、長年にわたる日本とロシア両国の首脳による継続的な対話や、平成4年から実施されている「ビザなし交流」による日本人と北方四島に在住するロシア人の相互訪問などにより、両国間の相互理解と友好が深められてきております。

また、昨年8月には、「北方四島交流訪問事業」として30名の中学生・高校生が、色丹島を訪問し、北方四島在住のロシア人青少年とバレーボールや意見交換会などを通して相互理解を深めるなどの取組が進められております。

こうした中、皆さんのような若い方々が、この弁論大会への参加を通して、北方領土問題に対する関心をより高め、日本とロシアの両国民の相互理解を深めつつ、返還運動を一層広げ、領土問題を解決していこうとすることは大変意義深いことであり、国際平和の維持と領土問題の平和的な解決のためにも大きな意味があると考えております。

昨年の大会においては、「これからの返還運動は、元島民の方だけでなく、国民一人ひとりが取り組んでいくべきものであり、署名活動、地域集会、ビザなし交流の継続と発展を通して日本が一つになる時である」という意見や、「日本では『ロシア学』を、ロシアでは『日本学』を授業に取り入れることにより、互いに対する興味・関心が深まり、今まで以上に交流が進むのではないか」というアイデアなど、素晴らしい内容の発表が数多くありました。

今回、本大会で発表される皆さんも、多くの資料を調べたり、様々な方々からお話を伺ったりするなどして、北方領土問題の歴史的背景や領土に関する国際法の意義などについて理解を深めるとともに、北方領土問題がいかに身近であり、かつ、日本にとって大切な問題であるかに気付いたのではないのでしょうか。

結びに、次代を担う皆さんの若さと熱意あふれる素晴らしい提言や発表が、多くの人々の共感を得て、北方領土返還運動の輪がさらに広がり、一日も早く北方領土の返還が実現されることを心から願うとともに、皆さんがこれまでの努力の成果を存分に発揮されることを期待して、激励の言葉といたします。





## 第27回“北方領土を考える”高校生弁論大会プログラム

開 会 式 感謝状贈呈	(12:30開会) 長年応募いただいた学校に感謝状を贈ります。 外務大臣感謝状 北海道根室高等学校 様 (社)北方領土復帰期成同盟会長感謝状 旭川大学高等学校 様
第 I 部	高校生弁論大会 「主 題 ～北方領土について考える～」 ● 審査員紹介 ● 弁論発表 14校 代表 14名 (発表は一人7分以内)
第 II 部	ミニコンサート 出演: WOODWIND QUINTET ◆メンバー ☆フルート: 八條 美奈子 ☆オーボエ: 加勢 麻衣子 ☆クラリネット: 狩原 枝里子 ☆ファゴット: 石黒 玲 ☆ホルン: 上田 博美
第 III 部	表彰式 ● 審査講評 ● 成績発表 ● 表 彰 最優秀賞 1名 外務大臣賞 優 秀 賞 1名 北海道知事賞 優 良 賞 3名 北方領土復帰期成同盟会長賞 ※最優秀賞及び優秀賞受賞者には副賞として『総理大臣表敬訪問』を実施します。
閉 会	

### ■ 弁論発表者 (発表順)

規準弁論 美馬 蒔葉 4回生 北海道登別明日中等教育学校	8	根塚 真帆 1年生 北海道根室西高等学校
1 佐藤 彰恵 1学年 立命館慶祥高等学校	9	伊戸川大夢 2年生 北海高等学校
2 小島 拓 1学年 北海道根室高等学校	10	藤井 智康 3学年 北海道名寄産業高等学校
3 中本 真子 2年次 北海道札幌旭丘高等学校	11	臼杵 七海 2年生 旭川藤女子高等学校
4 鈴木 夢 2年生 北海学園札幌高等学校	12	畑山 華澄 2年生 旭川大学高等学校
5 金橋 茉由 1学年 武修館高等学校	13	高橋 風音 1学年 北海道鹿追高等学校
6 高松 瑞樹 2学年 北海道札幌月寒高等学校	14	戸田幸一郎 2学年 函館ラ・サール高等学校
7 志田 慧 5回生 北海道登別明日中等教育学校		

### ■ 大会審査員 (順不同)

佐藤 和子	札幌市女性団体連絡協議会会長
南出 裕	北海道新聞社編集局次長兼報道センター長
守屋 開	北海道高等学校文化連盟弁論専門部長 (北海道札幌旭丘高等学校校長)
井澗 裕	北海道大学スラブ研究センター学術研究員
齊藤 啓輔	外務省欧州局ロシア課事務官
田尻 忠三	北海道総務部北方領土対策本部長
緒方 公	北海道教育庁教育指導監

【 最優秀賞 】



根塚 真帆

北海道根室西高等学校  
1年生

外務大臣賞

北方領土復帰期成同盟会長賞

【 優秀賞 】



鈴木 夢

北海学園札幌高等学校  
2年生

北海道知事賞

北方領土復帰期成同盟会長賞

【 優良賞 】



畑山 華澄

旭川大学高等学校  
2年生

北方領土復帰期成同盟会長賞

【 優良賞 】



高松 瑞樹

北海道札幌月寒高等学校  
2学年

北方領土復帰期成同盟会長賞

【 優良賞 】



中本 真子

北海道札幌旭丘高等学校  
2年次

北方領土復帰期成同盟会長賞



## 第27回大会応募高等学校(五十音順)

応募校	応募生徒数
旭川大学高等学校	2
旭川藤女子高等学校	1
函館ラ・サール高等学校	1
武修館高等学校	33
北海学園札幌高等学校	1
北海高等学校	1
北海道根室高等学校	1
北海道根室西高等学校	1

応募校	応募生徒数
北海道札幌旭丘高等学校	1
北海道札幌月寒高等学校	1
北海道鹿追高等学校	4
北海道登別明日中等教育学校	2
北海道名寄産業高等学校	1
立命館慶祥高等学校	1
計 14校	51名

## 応募実績校地区別一覧

地区	学校数	応募実績校 ( )内は応募回数		
札幌	18	北海(27) 有朋(16) 札幌龍谷学園(16) 北海学園札幌(18) 札幌東豊(5) 札幌旭丘(11)	北星学園女子(2) 札幌月寒(8) 札幌平岸(2) 札幌藻岩(5) 札幌聖心女子学院(3) 札幌西(3)	北嶺(2) 札幌星園(1) 札幌北(1) 札幌東陵(1) 札幌藤女子(1) 札幌工業(1)
石狩	4	立命館慶祥(14) 野幌(1)	石狩南(1)	大麻(7)
渡島	3	函館白百合学園(10)	函館大付属柏稜(1)	函館ラ・サール(3)
檜山	1	江差(1)		
後志	3	小樽潮陵(2)	ニセコ(1)	蘭越(1)
空知	2	岩見沢緑稜(1)	幌加内(1)	
上川	9	旭川大学(10) 旭川藤女子(6) 名寄農業(3)	名寄光凌(1) 旭川東(1) 下川商業(2)	旭川北(1) 旭川龍谷(1) 名寄産業(1)
留萌	1	天売(1)		
宗谷	1	礼文(2)		
網走	3	網走(13)	北見藤女子(2)	北見商業(9)
胆振	3	室蘭工業(2)	厚真(1)	登別明日中等教育(6)
日高	2	えりも(1)	様似(1)	
十勝	8	白樺学園(11) 帯広南商業(4) 帯広三条(4)	帯広柏葉(1) 帯広農業(1) 帯広工業(1)	鹿追(4) 浦幌(1)
釧路	12	武修館(23) 釧路工業(11) 厚岸潮見(5) 釧路湖陵(4) 釧路明輝(4) 釧路北を含む	釧路東(2) 釧路北陽(2) 釧路江南(1) 釧路商業(1) 標茶(2)	阿寒(4) 弟子屈(2)
根室	7	根室(20) 根室西(16) 別海(9)	中標津(3) 中標津農業(8) 標津(2)	羅臼(8)

計 77校

## 1 審査講評



審査委員長

守屋 開

北海道高等学校文化連盟弁論専門部長

本日は第27回“北方領土を考える”高校生弁論大会とすることで、高校生の弁士の皆さんご苦労様でした。

また、顧問の先生方には、いろいろご指導いただき、感謝申し上げます。

この弁論大会はテーマが「北方領土を考える」ということで、普通の弁論大会と異なるところが1点あります。その中で、いま審査を行ってきましたが、審査員の先生方からはいろいろなご意見をいただきました。私の方からは講評と言うよりも、審査員の先生方のご意見をまとめた形でお伝えしたいと思います。

今回は14校51名の中から選出された14名の弁士の皆さんがここで自分の意見を、いろいろ構築されて話されたのではないかと思います。

はじめに、多くの審査員の方から、高校生らしく意見を述べていたという意見がありました。

次に、弁論について出されたいろいろな意見の中から、いくつか紹介したいと思います。

まず、こういう点はどうなのかなということで、評論家になっている方がいた、自分の意見をもう少し詳しく伝えた方がいいのではないか。演技が若干過剰になっている方もいた。それから、この弁論大会は北方領土をテーマにしているということで、帰属意識を含め時代の流れとともに、考え方や見方が徐々に変わってきているという感想を述べられた審査員もいました。

伝え方の工夫、独創性ということをもう少し工夫してもらおうと、もっと良くなるのではないかと、というご意見もありました。また、のびのびとした考え方で、体験やいろんな取り組みを伝える、研究したことを伝える、ということをされていたのではないかと、というご意見もありました。

もう一つは、現状を分析し、練り上げていけば、これからもっと良くなるのではないかと思うので、プラスになる方向で、今後ともよろしくお願ひしたいというのが、審査員の皆さんの意見でした。

最後に、この弁論大会は「北方領土を考える」というテーマがありますので、このことについて留意していただきたい点が二つほどありますので、後輩の方にも伝えていただきたいと思います。

まず、語句とか用語の使い方をもう少し吟味するというか考えながら使った方がいいのではないかと。このことは顧問の先生から教えていただけるのではないかと思います。

それから、可能であれば元島民の方、関係者の方に取材をして、そのお話を聞いた上で自分の考え方を構築していけば、もっと素晴らしい弁論になるのではないかと。ということです。

最後に、今回の14名の皆さんは素晴らしい弁論でした。また、基準弁論の方も素晴らしかったです。今後は後輩や友人、それから多くの皆さんにこの北方領土について伝えていって広めていっていただきたい。

今日は、弁士の皆さん、本当にご苦労様でした。



## 2 入賞者弁論文集

### 最優秀賞

北海道根室西高等学校 1年生 根塚 真帆

# 「根室発・小さな種から大木へ」

私たちの住む根室の納沙布岬から、北方領土の貝殻島までは、わずか3.7キロメートル。陸続きであれば、歩いて行ける距離です。しかしながら、自由に訪れることが許されない地。それが北方領土です。

私はもともと帯広に住んでおり、恥ずかしながら、根室に来るまでは「北方領土」という言葉さえ知りませんでした。しかし、学校の授業で北方領土のことを学び、非常に深い問題であることに気づかされました。本来は日本の土地なのに、なぜ、70年近くにも渡ってロシアに占領されたままなのか。日本は正当な返還要求をしているのに、なぜ？北方領土について学ばば学ほど、私の心の中には、疑問と悔しさが沸いてきました。「何か私にも出来ることはないだろうか」。いても立ってもいられなくなった私は、根室市内のイベントなどで返還要求の署名活動を行っているのを見つけては、積極的に名前を書きに行くようになりました。そして、高校に入学して出会ったのが、今所属している「北方領土研究会」です。北方領土のことを広めていこうと、根室はもちろん、北海道も飛び越えて活動している先輩方の姿を見て、「私も力になりたい」と強く思ったのが入部のきっかけです。まだメンバーの一員となつてからの日は浅いですが、先日、早速活躍の場が訪れました。根室高校さんと協力して行っているラジオ放送の収録です。この活動は、地元の根室の方々に、北方領土の歴史や現状など、ラジオを通じて問題を提起し、領土返還への気運を高めていくことが目的です。私が担当したのは、返還要求運動の概要と現状の紹介の回でしたが、「知ってもらいたい」という思いが強いだけに、話し方には自然と気合いが入ります。この活動は、北方領土を身近に感じている根室の方々向けの活動でしたが、「ビザ無し交流に参加して実際に北方領土を訪れてみたい」「出前講座で北方領土問題を訴えるために他府県にも飛び出していきたい」と、さらに大きく夢が膨らんできました。

領土問題に関して、最近、私はとても気になっていることがあります。それは、竹島や尖閣諸島についてです。テレビや新聞で報道を目にし、根室と同じような悩みを抱えている地域があることを知ると同時に、自分がその問題について何も知らないことに気づき、関心の低さにはっとさせられました。北方領土問題についても、意識の低下、特に私と

同年代の10代から20代の若者にその傾向が顕著に表れていることが指摘されています。いちばん恐ろしいのは、「無関心」です。まずは、共に問題を考える仲間を一人でも増やしていくことが大切だと感じました。地元根室での署名活動や島民の方との交流、そして他府県への出前講座など、これまで先輩方が粘り強く継続してきた活動に加えて、私が新たに挑戦してみたいと考えているのは、同じように領土問題を抱える、島根県や沖縄県の方々との積極的な交流です。日本固有の領土であるにも関わらず、自由に行き来出来ないという点は、竹島や尖閣諸島も同じです。不法に土地を占拠されていることへの無念さや現状を何とかしていきたいという気持ちなど、思いを共有出来る部分がたくさんあると思います。具体的な実践としては、領土問題に対する関心を喚起するためのパンフレットを共同で発行したり、領土問題を考える「出前講座」を合同で開いたりすることを考えています。共に啓発活動を行って署名を集めたり、それぞれの地域訪問を年に数回設けたりするなど、より深く問題を考えるよい機会になるのではないのでしょうか。手を取り合つて領土問題を訴えていくことで、国全体においても領土問題への意識が高まっていけばいいと考えています。他府県の出前講座に参加した先輩の話や聞くと、中には北方領土に関して強い関心を抱いている方もいて、質疑応答では鋭い質問が飛んでくることもあるそうです。このように、根室から遠く離れた地域にも、「仲間」はたくさんいます。ひとりでも多くの人に領土問題を考えてもらいたいのが私の願いです。領土問題は、国を挙げて取り組まなければならない最重要課題です。「悔しさ」や「怒り」の感情だけでは解決できません。地域間で交流の機会を増やし、一丸となって解決への道を互いに模索していくことが大切ではないかと考えます。

私のこれからの役目は、「領土問題について知ってください」と、小さな種を蒔いていくことだと思っています。その種が、根を張り、枝を伸ばし、日本や世界という垣根をも越えて、大きく葉を広げた結果、「領土返還」という実を結ぶのではないのでしょうか。一人一人の訴えや思いがひとつに結集したとき、大きな力を発揮すると思っています。今こそ、手を取り合つて協力していきましょう。

## 「北方領土を考える」

「北方領土問題を専門の方に学ぶ機会を設けていただけませんか。これまで部員のみannaによる学習会も行ってきました。先輩方が学んだ資料も見ました。でも、今得られることで新しいことはありません。」

私はクラブの顧問の先生にこう言いました。

私たちの世代にとって、北方領土問題は身近なものではなく、むしろ遠い話題なのです。マスコミによって左右されはしますが、今注目を集めているのは竹島と尖閣諸島問題です。北方領土返還と言いますが、これまで国民の声が増えることはなかったように思いますし、ロシアと日本との話し合いも結局は進展がありません。

北方領土が日本に返還される日は本当に来るのでしょうか。

クラブ顧問の先生は、過去にビザなし訪問団に参加し、色丹島でロシア人とスポーツ交流をしたこと、ロシアの家庭料理を馳走になったこと、日本人墓地を見せてもらったことなど、当時のことを教えてくれました。そして、最近ビザなし訪問に参加した友人の話と合わせると、島はこの10年で整備が進み、生活水準が向上していることも知りました。この北方四島ビザなし訪問事業も平成4年度から始まり、23年度までで日本から259回10,442名が、北方四島からは183回7,653名が参加したそうです。私はこうした話しと資料から、この20年間の地道な交流は、日本とロシア相互の友好を積み重ねてきたとっていました。しかし、こうした私の思いは簡単に打ち消されたのです。

メドヴェージェフ首相が2010年、2012年と2回も北方領土に降り立ち、ロシアによる実効支配を強く世界に示したのです。この事実はお互いの信頼関係構築を目的に支援と交流を進めてきた日本の姿勢に相反するものです。そしてつい最近では、昨年10月にロシアのセルジュコフ国防相が、国後島と択捉島に駐留する軍の整備のため、今後2年間で約180億円の連邦予算措置をとったと発表しました。

こうしたロシアの行動を考えると、私は、北方領土が日本に復帰することはますます遠のいていてと考えてしまいます。北方領土返還運動はこれまでの活動を継続するだけでよいのでしょうか。私たちは新たな返還運動を考えると、ときを迎えたのではないのでしょうか。

私の今回の弁論発表に先立ち、母がこんなことを言いました。

「お母さんの時代は北方領土問題なんて学校でもたいして教えられなかった。だから、基本的なこともわからない。あなたにとってはいい勉強になったでしょ。」

私たち親子二世代には、近くにはあっても遠い島。でも、こう考える人は少なくないと感じるのです。私はこの北方領土問題を考えるうちに、二世代にわたる北方領土無関心世代をこれ以上増やしてはならないと、反省も込めながら訴えます。

私はもっと若い世代の人々を巻き込むことの可能な返還運動を提案します。

まず、北方領土復帰期成同盟主催の、元島民による語る会をもっと中高生にたくさん聞かせてください。沖縄では、元ひめゆり学徒隊の方やその子孫の方が不戦の誓い、史実を伝えています。北方領土問題にあっても、史実を風化させず、元島民の心の叫びを聞き、歴史を受け継ぐ機会を充実させてください。

また、歴史を受け継ぐと同時に、未来に向けた大々的なキャンペーンを行うのも効果的と考えます。沖縄のひめゆり学徒隊については、ドラマ、映画、歌があり、それらが教材ともなっています。北方領土の実話を元に、映画「硫黄島からの手紙」にみられる人気俳優の起用や、優れた演出を行った映画を制作してはいかがでしょうか。きっと、若い世代からの関心も集められるはずです。

また、北方領土の歴史やそこでの暮らしを元にアニメを制作し、ネットで配信したり、北方四島をモチーフにした返還運動キャラクター「ほっぼちゃん」をそのアニメに登場させ、さらには商品化させるのです。そして、それらを小中学校の授業でも積極的に活用するのです。

今回、私は専門家の方に直接北方領土問題を学ぶという機会を逃しはしましたが、これが難しい問題であるからこそ、しっかりと現状を学び、未来を考える目を育てたいのです。

この問題を知るにとどまっただけでは領土返還は現実のものとはなりません。

私たち若者は求めています。北方領土問題に対する学習とアイデア発信の機会の充実を！



## 「北方領土について考える」

「行きたいときに行けないんだからなあ。」

十年振りに故郷の多楽島を訪れることになった祖父は、嬉しいような哀しいような表情で、そう呟きました。

祖父は昭和16年、歯舞群島と呼ばれる島々の最北端にある、周囲24km、海拔30mほどの小さな島に生まれました。台地状で目立った樹木もなく、整備された港もない、鮭や鱒、鱈やイカなどの漁業と、缶詰工場が1つあるだけの、いたる所を牛が自由に動き回るようなどかな島だったといえます。

昆布漁を営む生家は、豊かな資源の恩恵を受け楽な生活で、流水で昆布採りができない冬場には、一家揃って旭川や登別、時には東北の方にまで足を運ぶこともあったとのこと。

そんな生活が一変したのは、日本がポツダム宣言を受諾して、無条件降伏した8月15日から3日後の18日、無抵抗になった状況下で、ソ連軍が千島列島への侵攻を開始し、24日にシュムシュ島、26、28日にマツア島、択捉島、9月1日から4日にかけて国後島、色丹島、そして歯舞群島へと侵入し、いわゆる北方領土・四島を占領してからでした。

当時5歳の祖父は、白昼、武装したソ連兵がやって来る度に、母親に命じられ姉と一緒にトイレに隠れ、数日後しばらく親戚の小舟で家族と共に真夜中に島を脱出し、雨降りの中根室の海岸に寝ぼけ眼のまま上陸して、その後、旭川の隣町の親戚を頼って移り住み、納屋を借りて過ごし、翌年から当麻町での開拓に入り、急遽建てた三角小屋で暮らしながら開墾に励み、電器もラジオもない非常に厳しい生活を乗り越え、今があるのだそうです。

昨年、私たちは、嫌でも日本の領土について考えさせられる夏を迎えました。不法占拠中の国後島に、ロシア前大統領メドヴェージェフ首相が、日本政府の再三の自粛要請を無視して二度目の訪問を強行し、8月10日には竹島に韓国大統領が歴代大統領初の上陸を敢行、日本が実行支配する尖閣諸島では、わざわざ予告してやって来た中国人活動家がいとも簡単に魚釣島に上陸し、世界に向かって中国国旗を振るといふ暴挙を許してしまいました。

これらの問題を生み出したのは、もとを正せば、日本です。日本が世界を相手に無謀な戦争に踏み出し、敗戦後も、結局

自らの手でその戦争責任を問うことなく今日に至っているからです。フランス文学者の鹿島茂氏は、今の日本の体たらくは『面倒くさい問題を先送りし続けてきたことの『末路』だ』として、外交や内政、教育や家族関係、男女関係や出産・子育て、その全てにおいて「『面倒くさいことは嫌だ』という精神が辿り着いた最終的結果が、今の日本の姿だ』と言っています。

領土問題1つとっても、韓国、中国、ロシア共驚くほどの凶々しさと傲慢さでそれぞれの島が自国の領土であることを繰り返し繰り返し自国民に教育しています。しかし、私たちの日本では、ほとんど学校で学ぶような場面はなく、教科書にわずか何文字かで、「日本固有の領土である」と書かれている程度で、歴史的経過や日本が日本の領土と主張する根拠さえも丁寧に教わることはありませんでした。

「祖父の故郷を取り戻したい。」

それが、私の密かな願いです。

だからこそ、「この6年間だけでも総理大臣が6人も代わるような国にまともな外交ができる訳もなく、相手国には完全に馬鹿にされているのが実状だ。」と嘆く、故郷を失った人々の気持ちが、私には痛いほどよく理解できます。

祖父は72歳の今も、千島歯舞居住者連盟の一員として、様々な返還運動に誠心誠意取り組んでいます。

当時有効だった日ソ不可侵条約を無視して対日参戦した上に、日本が戦争終結を宣言し武装解除した島々に不法侵攻し、今も占拠し続けているロシアに、日本政府は国家の国民に対する基本的義務の重要な要素としての、生命と財産を守るという役割を、どう果たそうとしているのか、私は改めて聞いてみたいと思うのです。

私は将来教師になりたいと思っています。ですから、祖父のような哀しい思いをしなくてすむように、平和や領土に関する問題について、きちんとした意識を持って学び、その上で、しっかりと知識を身につけ、正しい教育活動を通して、次の世代の人々に発信してゆけるような力を蓄えてゆきたいと考えています。そして、日本が日本らしくあるために、私たちに何ができるのかを、今後の重要な課題として、主体的に見つめてゆきたいと思っています。

## 「写真で見るとよりきれいだった」

三泊四日のビザなし交流を終えた私は、北海道知事、高橋はるみさんの隣で記者会見に出席していました。目の前には大勢の報道陣。高校生代表として、今回の貴重な体験を伝えたいという思いが溢れださそうでした。

そのとき、記者の方からこんな質問が。

「高松さんの考える、北方領土問題の解決策は何ですか？」私は答えられませんでした。悔しくて情けなくて、札幌に帰ってきた私は島で撮った数百枚の写真を見ながら、晴れない気分で夏休みを過ごしました。

そして、強く思ったのです。「自分なりの答えを見つけること、これが訪問団員である私の義務だ！」と。

ビザなし交流のメインプログラムの一つである意見交流会。司会を務めた私は、あっという間に時間が過ぎてゆく中、やはり領土問題の話は切り出せないことにもどかしさを感じたのです。

北方領土問題は、もう話し合いだけでは解決出来ない段階に来ていると強く感じました。次のステップへ行くべきときなのです。

「島を返せ」「日本の領土だ」とロシア側に言い続けること+αが必要なのです。

最近テレビで騒がれている竹島問題と尖閣諸島問題。領土問題には、人情や正論が入る余地はないということを痛感しました。

そしてもう一つ感じたことがあります。中国や韓国の国民は国家を後押ししていることです。間違っているにもかかわらず。

日本の場合は、正しいにもかかわらず、国家を国民が後押ししているようには思えません。

そして現在、北方領土のインフラ整備・農業に中国や韓国の企業、そして北朝鮮の労働者が進出しています！明らかに日本に対するロシアの嫌がらせそのものです。日本はもっと正式に何度も反発するべきです。

今、領土問題を、日本の正当性を、世界に発信するべきです！政府広報のような地味なものではなく電通にでも頼んで、中国・韓国以上の高いクオリティーの発信をするべきです！中国・韓国は自分を正当化して日々、世界に発信している。

日本人の美しいところ。それは、たとえ自分が正しいと思っても、しつこく言わない。「言わなくても、自分の行動を見て、相手が分かってくれるだろう。」と思うからです。こんな国、他にはないです。

口論することを好まない、やさしい国なのです。国内ならそれでいいのでしょうか。しかし、やさしすぎてお人好しになっているのではないのでしょうか。

例えば、「北方領土が返還されたら、島に住んでいる人々はどうなってしまうのだろうと、返してもくれない島の人々のことを心配をするほどなのですから。

領土問題は時間が経ち過ぎて、島にロシア人の生活が根付いてしまいました。現在住んでいる住人たちの次の世代・その次の世代が島に住んでしまったら、ますます返還は難しくなるでしょう。

中国や韓国のホテルが立ち並びロシアのリゾートにされてしまう前に一刻も早く手を打たなければなりません！

結局、日本国家だけではなく私たち国民一人一人が世界に向けて返還を発信し続けて政府の後押しをしていかなければ返ってこないのです！動画サイト・SNSなど、世界に発信する方法はたくさんあります！

ビザなし交流のとき、私は一眼レフのフィルムカメラを肌身離さず持ちシャッターを押し続けました。次はいつ行けるか分からない島。与えられたチャンスを無駄にしたいくなかった。そこで見た物・人をフィルムに焼きつけたかった。

「写真で見るとより、自分の目で見たほうが日本の領土としての島はきれいだなあ。」誰もが口をそろえて言う日が来ることを、私は待ち望んでいます。



## 優良賞

北海道札幌旭丘高等学校 2年次 中本 真子

## 「誰かではなく…」

私は、歴史が大の苦手です。けれど、そんな歴史の授業のなかで、とても印象に残る小学校の先生の北方領土問題に関するお話がありました。「日本とロシアは、戦争を繰り返すうちにすれちがってしまったんだよ。一度日本は、ロシアのものだった千島列島を貰ったんだ。けれどその後、日本は戦争に負けて、土地を返すことになった。その時、ロシアはもとから日本のものだった土地まで、貰うことができると考えてしまったんだ。けれど、条約にそのようなことは一文字も書いてない。北方四島は日本のものなんだ。はやく誤解が解けて、領土問題を解決できるといいね。」難しい条約がたくさん登場する領土問題を小学生にもわかりやすく、説明してくれた先生の言葉を聞いて、「それは大変だなあ…。誰かが2国間の誤解を解いてくれたらいいのに。」と考えたことを、今でもはっきりと覚えています。

高校1年生の冬休み、私は雪祭りの会場で行われる北方領土返還要求の署名活動のお手伝いをしました。雪祭りは多くの人々にぎわっていましたが、足を止めて署名をしてくださる人の数の多いことにも驚きました。その上「はやく解決するといいね。寒いけど頑張ってるね」とあたたかい言葉をかけてくださった方もいらっしゃいました。そのお手伝いをきっかけに、私はそれまであまり知らなかった北方領土のことについて調べてみようと思いました。インターネットで「北方領土」という言葉を検索すると、予想以上のヒット数。どのページからも、北方領土をはやく返還してほしい、という声が聞こえてくようでした。これまでに集まった署名の数は、8,300万を超えています。日本中の人々が、北方領土の返還を願っているのです。

私はこの夏、ビザなし交流で北方領土の色丹島を訪問する機会をいただきました。出発前、先生の「返還を実現するための活動だということを忘れずにいってらっしゃい」という言葉を胸に出発しました。心の中は、北方領土ってどんな土地なんだろう。現地の方とは仲良くできるんだろうか。領土問題について話をきけたらいいな。期待と不安でいっぱいです。しかし、この事業を良く知る方に、「現島民の人に

領土問題の話をして、困らせるだけだからやめたほうがいいと思うよ」というアドバイスをいただいたのです。それまで私は、島民の方は様々な思いを抱えているだろうから、そのお話をうかがうために訪問するのだと思っていました。でもそれが違うのなら、なんのために訪問するのだろうか？ そんな疑問を抱えたまま、北方領土に到着しました。最初に迎えてくれたのは、民族衣装を身にまとい、歓迎をあらわすパンを持って、笑顔で挨拶をする可愛らしい女の子たち。その後も次々と明るく挨拶をしてくれる現地の方々。2日に及ぶ十数時間の訪問の中で、現地の方と一緒に食事をしたり、ホームビジットをしたりと交流する時間はとても楽しく、あっという間に過ぎてしまいました。そしてようやく私は自分の疑問への答を見つけることができました。お互い言葉がなかなか通じないなか、辞書を使って必死に会話をして、自分の思いを伝えようと努力する。短い時間でしたが、別れるときは本当に寂しく、小さな信頼関係が築けたように感じました。この信頼関係こそがかけがえのないものだったのです。私は交流事業を続けることの意味の一つを、実感することができました。

そして、署名活動のお手伝いをしたこと、ビザなし訪問に参加したことで、私の北方領土に対する思いはがらりと変わりました。それまではどこか他人事のように感じていた返還活動に、自分ももっと積極的に関わって、少しでも早い返還に貢献したい、という思いが強くなったのです。日本固有の領土である北方領土が占拠されてから既に65年以上の時がたちました。少しずつ薄れつつある国内の領土返還の声を、途切れさせてはいけません。携帯に保存された、北方領土の写真をインターネットにアップし、たくさんの友達に北方領土の現状やこの問題の大切さを話すこと。学校祭では、領土問題についてまとめ、多くの人に見てもらいたい。雪まつりでは、また1人でも多くの人に署名してもらえよう大きな声をはりあげる。ひとつひとつは小さな行動かもしれませんが、しかし、他の誰かではない、自分の声で、四島返還を訴え続けていきたいと、今私は強く思っています。

## 1 訪問目的

“北方領土を考える”高校生弁論大会において最優秀賞及び優秀賞を受賞した高校生による内閣総理大臣への表敬訪問を行い、内閣総理大臣から激励をいただくとともに、受賞者の思いを届け、今後の大きな励みとする。また、当弁論大会についての国内への啓発活動の一環とする。

## 2 訪問先

☆ 安倍内閣総理大臣

平成25年3月11日(月) 18:20～ 総理官邸

## 3 訪問者

○ 根塚 真帆(北海道根室西高等学校 1年)

○ 鈴木 夢 (北海学園札幌高等学校 2年)

《引率者》 石川 由佳子(北海道根室西高等学校 教諭)

小林 真史 (北海学園札幌高等学校 教諭)

《同行者》 石部 彰 ((社)北方領土復帰期成同盟専門員)

## 4 訪問概要

◇ 国会開会中でしたが、外務省をはじめ関係省庁の皆様のご尽力により、安倍内閣総理大臣表敬訪問が実現いたしました。

安倍総理大臣からは、「お二人のような若い方に北方領土問題に関心を持ってもらって、弁論発表をおこなっていただいたというのは、心強い限りです。領土・領海を守るといのが、本来、国の基本ですから、若い皆様に領土問題について理解をしていただいて、自分の考えで主張をしてもらおう。これがとても大切なことであり、国際機関にアピールしていく人材を育てていく意味においても、この弁論大会は有意義だと思っています。そういう中で、お二人とも立派な弁論をおこなっていただき、お礼を申し上げたいと思います。」という激励の言葉とともに、「夢」と書かれた色紙を頂きました。

なお、当日の総理表敬訪問に際し、山本一太内閣府特命担当大臣(沖縄及び北方対策担当)の同席をいただきました。



左から北海学園札幌高校 鈴木 夢さん、安倍総理大臣、根室西高校 根塚 真帆さん



左から北海学園札幌高校 小林先生、鈴木 夢さん、安倍総理大臣、根室西高校 根塚 真帆さん、石川先生、山本内閣府特命担当大臣

## 「総理大臣表敬訪問」年度別実績表

	表敬訪問日	内閣総理大臣		外務大臣	
第1回	昭和62年3月 2日	中曽根 総理大臣	総理官邸	倉成大臣	大臣応接室
第2回	昭和63年3月22日	竹 下 総理大臣	総理官邸	宇野大臣	大臣応接室
第3回	平成 1年3月15日	竹 下 総理大臣	総理官邸	宇野大臣	大臣応接室
第4回	平成 2年3月22日	海 部 総理大臣	総理官邸	中山大臣	大臣応接室
第5回	平成 3年3月22日	海 部 総理大臣	総理官邸	鈴木政務次官	政務次官室
第6回	平成 4年3月17日	加 藤 総理大臣	大 臣 室	兵藤欧垂局長	欧垂局長室
第7回	平成 5年3月23日	宮 澤 総理大臣	大 臣 室	柿澤政務次官	政務次官室
第8回	平成 6年3月30日	細 川 総理大臣	大 臣 室	東政務次官	政務次官室
第9回	平成 7年3月29日	村 山 総理大臣	総理官邸	柳沢政務次官	政務次官室
第10回	平成 8年3月25日	橋 本 総理大臣	総理官邸	浦部欧垂局長	欧垂局長室
第11回	平成 9年4月 1日	橋 本 総理大臣	総理官邸	浦部欧垂局長	欧垂局長室
第12回	平成10年4月 1日	村 岡 総理大臣	総理官邸	柳井事務次官	事務次官室
第13回	平成11年4月 2日	小 淵 総理大臣	総理官邸	武見政務次官	政務次官室
第14回	平成12年3月31日	小 淵 総理大臣	総理官邸	山本政務次官	政務次官室
第15回	平成13年3月14日	森 総理大臣	総理官邸	衛藤副大臣	副大臣室
第16回	平成14年3月13日	小 泉 総理大臣	総理官邸	植竹副大臣	副大臣室
第17回	平成15年3月11日	小 泉 総理大臣	総理官邸	土屋外務政務官	外務政務官室
第18回	平成16年3月15日	小 泉 総理大臣	総理官邸	逢沢副大臣	副大臣室
第19回	平成17年3月 8日	小 泉 総理大臣	総理官邸	町村外務大臣	大臣応接室
第20回	平成18年3月 9日	小 泉 総理大臣	総理官邸	麻生外務大臣	大臣応接室
第21回	平成19年3月12日	安 倍 総理大臣	総理官邸	麻生外務大臣	参院外務省控室
第22回	平成20年3月 3日	福 田 総理大臣	総理官邸	小野寺外務副大臣	外務副大臣室
第23回	平成21年3月11日	麻 生 総理大臣	総理官邸	中曽根外務大臣	大臣応接室
第24回	平成22年3月23日	鳩 山 総理大臣	総理官邸	前原内閣府特命担当大臣	大臣応接室
第25回	平成23年3月11日	—	総理官邸	伴野外務副大臣	副大臣応接室
第26回	平成24年3月13日	野 田 総理大臣	総理官邸	玄葉外務大臣	大臣接見室
				川端内閣府特命担当大臣	大臣室
第27回	平成25年3月11日	安 倍 総理大臣	総理官邸	—	—
				山本内閣府特命担当大臣	総理官邸

# 第27回高校生弁論大会記録写真

## 1 開会



開催挨拶する堀会長



司会・中村 泉

## 2 感謝状贈呈



外務大臣感謝状の贈呈を受ける  
北海道根室高等学校



(社)北方領土復帰期成同盟会長感謝状の贈呈を受ける  
旭川大学高等学校

## 3 弁論発表



弁論会場の様子



弁論会場の様子



弁論会場の様子



審査の様子

# 第27回高校生弁論大会記録写真

## 3 弁論発表



聴衆



出場を待つ弁士

## 4 アトラクション



演奏：WOODWIND QUINTET



演奏：WOODWIND QUINTET

## 5 審査・表彰



審査の様子



審査結果を待つ弁士



審査講評



審査員の皆さん



最優秀賞の表彰



最優秀賞の表彰



優秀賞の表彰



優秀賞の表彰



優良賞の表彰



優良賞の表彰



優良賞の表彰

# 第27回高校生弁論大会記録写真

## 6 記念写真



参加者全員による記念写真



入賞者記念写真



最優秀賞・優秀賞者記念写真

## 毎年2月7日は『北方領土の日』です

北方領土問題に対する国民の関心と理解をさらに深めるために、政府は昭和56年1月6日閣議了解により、毎年2月7日を『北方領土の日』とすることを決めました。

2月7日は、安政元年(1855年)伊豆下田において日魯通好条約が調印された日で、平和的な話し合いによって、両国の国境を択捉島とウルップ島との間に定められました。

この歴史的な意義から『北方領土の日』として最もふさわしい日とされたのです。

『北方領土の日』前後には、国民世論を盛り上げる各種の行事が全国各地において開催されます。是非、ご参加・ご支援をお願いします。

